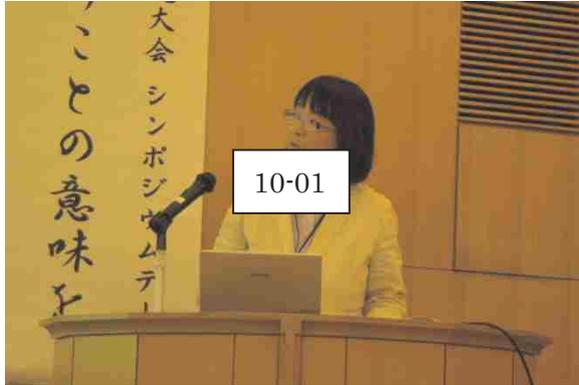


## 口頭発表「飼育担当教員の声から考える『学校で動物を飼うこと』の意味」 ～ I 市の公立小学校・飼育担当教員へのアンケート調査より～

田淵 薫



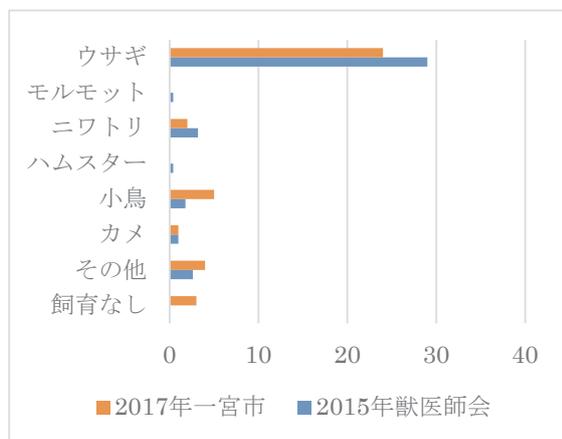
### 1 はじめに

2017年度の2～3月に、愛知県一宮市の公立小学校の飼育担当教員を対象にアンケート調査（回答数30校）を行った。愛知県では、2015年に愛知県獣医師会が、県内小学校の調査をしている。獣医師会で出版した『わかる！ 学校どうぶつ飼育ハンドブック』に、2015年の調査結果が掲載された。今回のアンケート結果は、その研究とも併記した。また、自由記述の回答内容から浮かび上がる、学校での動物飼育に対する教員の意識・思いについてまとめた。

### 2 一宮市内小学校の動物飼育の現状

2015年愛知県獣医師会の調査と重なる項目((1)～(7))については、グラフで併記した。グラフのない項目は一宮市の現状を記述した。同じ項目の無い調査は(8)以降に示した。

#### (1) 飼育している動物の種類は？



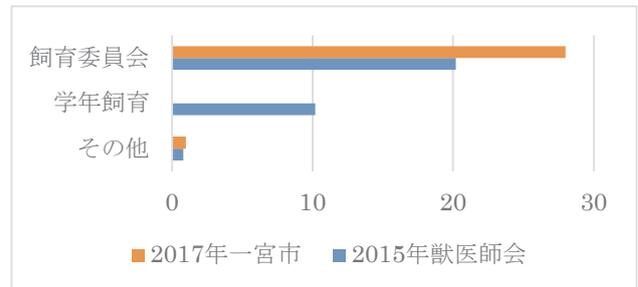
#### (2) 飼育にかかるお金

○ エサ代	学校予算(市費)	24校,
	P T A会計	3校
○ 獣医費用	学校予算	2校
	P T A会計	6校
	市総務課	1校

#### (3) エサの内容

ほとんどが混合飼料,  
自家製または近隣工場からもらう野菜

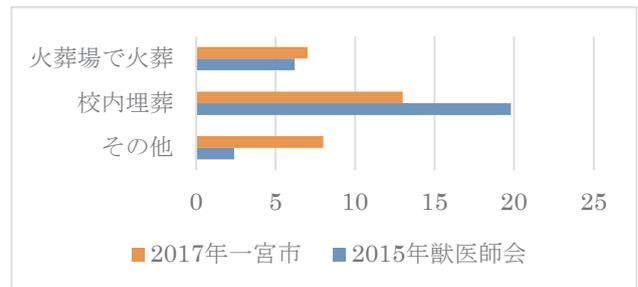
#### (4) 飼育方式は？



#### (5) 休日の飼育担当者

ほとんどの学校が、学校のある日は日直職員、学校休業日は休日管理業務担当者をお願いしている地域の方が、草木の水やりとともに行っている。

#### (6) 動物が死んだらどうする？



#### (7) 飼育日誌については、調査せず。

#### (8) 教育資源としての利用状況。

○ 獣医師のふれあい教室実施校	6校
○ 教育資源として使う学校	9校
国語(2校), 生活(8校),	
理科(1校), 図工(4校)	

#### (9) 児童の飼育動物への関心

○ 飼育動物に関心を持っている児童は、	
全児童	6校

- |            |     |
|------------|-----|
| 低学年児童      | 2校  |
| 教科で触れ合った児童 | 1校  |
| 関心のある児童    | 1校  |
| 世話をする児童    | 20校 |
- (10) 獣医との連携が欲しい場面での対応
- 動物の調子が悪い時
 

獣医に診せている.	14校
職員で対応	5校

 未経験, 突然死んだ, などの回答も.
  - 繁殖対策(対策が必要な学校 16校中)
 

去勢・避妊をしている	5校
雌雄分離	8校

 増えてしまった後, 4校が譲渡を行う.  
 「増加後戻る」という回答が3校あった.
- (11) 死亡告知(死亡経験のある 23校中)
- |            |    |
|------------|----|
| お別れ会       | 4校 |
| 放送・集会で告知   | 3校 |
| 職員経由・掲示で告知 | 5校 |
| 委員会児童に告知   | 2校 |
| 告知なし       | 9校 |

### 3 現状まとめ

一宮市内では, 飼育担当はほとんどの学校で飼育委員会が担っており, 学年飼育をしている学校はなかった。(4) 飼育動物を教育資源として活用している, と回答した学校は9校, 利用の仕方は低学年の国語・生活・図工に偏り, 十分に活用されているとは言えない。(8) 飼育動物に関心をもっている児童は「世話をする児童」に限定される学校が多い。(9) 飼育頭数が少なく, 繁殖対策を必要としない学校が多いが, 中には過繁殖を繰り返し, 生まれた子ウサギが日々死んでいったという記録もあった。「増加後戻る」という回答は, 子ウサギを死なせた結果かと思われる。去勢・避妊費用の出所がないという回答もあった。(10) 動物が死んだ場合, ある程度成長したウサギの場合は「火葬」という学校が多いが, 小鳥や生まれてすぐの子ウサギなどは「校内で埋葬」する学校が多い。(6) 死亡告知は, きちんとお別れ会をする学校は少なく, 告知をしない学校も9校あった。

### 4 飼育担当教員の声(自由記述より)

アンケートの自由記述から, 飼育担当教員の思いが透けて見える。

「ウサギがケンカをする」(多数)  
 「チャボとウサギの仲が悪い」  
 「ニワトリが乱暴で危険」  
 「児童の服などをかじる」  
 「寒さ・暑さでかわいそう」  
 「水道管が凍結した」  
 「飼育小屋の位置が良くない」  
 「飼育小屋の老朽化」  
 「床をコンクリート張りにした」  
 「小屋内の柵ができてウサギを分けられた」  
 「近所の人からの譲渡を断った」  
 「頭数が増えすぎた」  
 「死んだら, 次が導入できない」  
 「死んだ時の対応」  
 「子ウサギが死んでしまう」  
 「ウサギに介護が必要になった」  
 「鳥インフルエンザの心配」  
 「衛生面の心配」  
 「動物アレルギーの問題」  
 「予算が少ない」  
 「去勢・避妊の費用が出ない」  
 「命を預かる教員の負担」  
 「飼育の責任の所在」  
 「学校に飼育動物は必要？」

様々な思いが綴られる中で, 最も多くの担当者が記述したのは, 学校飼育動物による好ましい効果についてであった。

「世話をしたい気持ちを高められた」  
 「児童がウサギに興味をもち, 調べた」  
 「児童が環境を改善しようとした」  
 「名前募集イベントに多くの児童が参加」  
 「ふれ合いにより, 遊びに来る児童が増えた」  
 「ふれ合いで情緒が安定した児童がいた」  
 「不登校児童の登校動機の一つになった」  
 「飼育の仕事で, 協力・責任を学んだ」  
 などの実際の好ましいできごと。また,  
 「動物愛護の気持ちが育つと良い」  
 「『相手は自分の思い通りにならない』ということを実感できる」  
 「情操教育に大変有効」  
 「命のありがたみや大切さを理解できる」  
 「動物とのふれ合いが心を豊かにする」  
 などの願いや望み。

かわいい姿を見せたい。

設備を整えられ  
ると、いいなあ。

頭数管理は難しい。

死んだらどうする？

どうしようもないことだっ  
てある。

## 5 現場の問題点と教員の願いの両立

多くの小学校では、「既に飼育動物がいるから」という理由で動物飼育の活用や効果について意識の高低に拘わらず、動物飼育を継続している。担当になるのは、校務分掌として割り振られる職員で、場合によっては生き物が苦手でも担当になる。また、担当職員が学校飼育動物の死に初めて直面し戸惑うこともある。その時々判断は、担当職員に委ねられることも多く、動物飼育の経験が浅い職員は児童への委員会活動の対応とともに、飼育動物そのものへの対応も求められる。命を扱う責任の重さと、小学校内にある「動物飼育」は「軽いのんきな仕事」だという意識のずれを感じつつ職務に当たる職員もいる。

また、飼育火屋の老朽化や雌雄分離の柵の設置、床のコンクリート張りへの改修など、飼育環境を良くするためには予算が要る。去勢・避妊手術やケガの治療など動物飼育にはお金がかかる。しかし、その予算は充分ではない。これには、小学校内における「動物飼育」の価値の低さも関係している。

このような小学校内の「飼育」の価値の低さは、代々の担当職員や他の職員の「飼育動物」の利用率の低さが一因にある。飼育委員の児童だけが飼育動物に詳しくなり、低学年だけが飼育小屋に遊びに来て、低学年の一部だけが教科の学習に利用する、という状態では「動物飼育」の価値は上がらない。

しかし、その一方で、職員は飼育動物が児童にもたらすであろう「飼育動物への興味・探究心」「他者への優しさ」「命の大切さ」「動物愛護」「自然への畏敬」を期待し、願っている。また、飼育動物によって感じる「安心感」「癒し」「自己肯定感」などにより、救われる児童がいることも実感している。

この問題点と願いを具体的に解決する、3つのささやかな提案をしたい。

### (1) 飼育の基本の備えと、獣医師との連携

まず、学校で動物を飼育するための、飼育小屋（またはケージ）、給餌・給水の設備や物品、専用の清掃道具、敷き藁、餌 などが必要である。その上で、適正頭数の飼育動物がいて、世話をする担当がいれば、動物飼育

は始められる。基本的な動物飼育の書かれた書籍を備えると安心できる。冒頭で紹介した『わかる！ 学校どうぶつ飼育ハンドブック』には、寒さ・暑さ対策、飼育舎の工夫や改修など、分かりやすく解説されている。

また、獣医師と連携を取ることで解決することも多い。雌雄の区別、去勢・避妊の相談、繁殖(子育て)などは、獣医師との相談で解決できる。これらの方法は、飼育担当者が替わると途切れるような方法ではなく、担当者が替わっても継続できるよう、学校として行い、記録を残すことが大切である。

### (2) 学校間の連携

飼育動物の頭数・雌雄については、近隣の小学校間で連携すれば、1つの小学校で管理するよりも、リスクを分散でき、メリットを共有できる。1つの小学校で飼育動物の交尾・出産を無計画に繰り返すことは好ましくない。それを防ぐために雌雄を分離して飼育したり、去勢・避妊手術を行ったりする。(去勢・避妊手術は頭数管理だけでなく、動物が穏やかに過ごすためにも有効な手段である。)しかし、頭数管理を厳密に行えば、頭数は減る一方になる。動物飼育を維持するためには、「増やさない」管理だけでなく、「一定数を維持する」管理も必要である。そのためには、近隣小学校の飼育動物全個体について、雌雄・年齢・去勢避妊の有無・親子兄弟関係などの情報を把握するとともに、連携して管理するのが有効である。また、学校毎の飼育環境が、何頭程度飼育できるのか、出産子育て環境が整えられるか、などの情報を共有する。近隣小学校で1年に1回程度でよいので、飼育担当者が集まり、計画繁殖について話し合う。これにより、頭数減少のリスクを減らし、頭数維持のメリットを共有できる。

### (2) 学校間の飼育動物利用の情報共有

学校飼育動物の利用のされ方、位置づけは、学校によって違いがある。特別活動・児童会活動としての利用方法や活動手順、総合的な学習や道徳教材としての活用方法、教科の教材としての活用方法・利用方法、などは、担当職員や他の職員がその時々に行っている方法で、手探りでやっているのが現状である。

これらの学校飼育動物の利用活用の方法について情報交換会を行う。そして、その利用活用のための道具やプリントなどの共有を進める。いろいろな方法を知ること、現行の方法を改善したり、変えたりできる。学校飼育動物の利用の仕方だけでなく、動物たちの飼育環境も改善される可能性がある。担当教員職員の負担軽減にもつながる。

これらの実践や工夫を重ねて、全校児童が教科や特別活動、児童会活動の中で学校飼育動物に触れ、利用活用する機会が増えれば、小学校における動物飼育の価値が高まるだろう。その結果、予算を出す価値ありと認められる可能性も高まる。

学校で飼育される動物がそのように利用されるのはちょっとかわいそうだ、と感じる向きがあるかもしれない。しかし、学校で飼育されている動物は、盲導犬や災害救助犬と同じように「労働動物」と考えると適切なのではないと思う。担当職員・児童たちに大切にされるけれども、各教科・活動の教材として、ふれあいの対象として、仕事をする。動物福祉を考える時、学校飼育動物は「愛玩動物」ではなく「労働動物」と考えると、その在り方がまた分かりやすくなると思う。

## 6 模擬：学校間の連携・情報共有

### (1) 学校間連携

A～Eの近隣5校を架空で設定した。それぞれ自校分のデータを持って、模擬話し合いを試みた。

飼育環境の違いや現有頭数・雌雄などを照らし合わせ、可能な計画繁殖を探った。繁殖用の巣箱を持っている学校が無く、巣箱の入手が必要とわかった。(調査の段階では、繁殖に使える巣箱を持っている学校は無かった。)また、繁殖の方法について、獣医とも相談をした上で、基本的な方法を知る必要があると分かった。

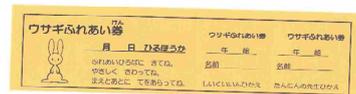
### (2) 情報共有

#### [飼育委員用・情報プリント]



#### [ウサギふれあいタイム①]

- ・ 児童数 1000 人越えのマンモス校。
- ・ 一年に 3 回。1 回につき、全学級に 10 枚程度のチケットを配付。
- ・ 3 人で 2 分間ふれあえる。



#### [ウサギふれあいタイム②]

- ・ 休み時間に飼育舎前の運動場を開放。
- ・ 当番の飼育委員がいる。
- ・ 野菜などを持ってこることもできる。

## 7 おわりに

職員の声の中に「(職員の負担や動物アレルギーのリスク、飼育小屋の環境の過酷さ、などいろいろ考えた時に)学校で動物を飼育する必要性はあるのか」というものがあつた。

確かに、「飼育委員会の活動のための飼育動物」や「動物好きの一部児童のための飼育動物」になっているならば、「必要はない」と言わざるを得ない。

しかし、実際には、小学校の教育課程の中に、飼育動物に纏わるものがあるにも関わらず、動物飼育についてほとんど何も知らない職員も多くいる。その点については、改善されるべきだと強く思う。

そして、「小学校に飼育動物がいれば、できる」魅力的な活用事例を、数多くまとめられれば、「小学校に飼育動物がいること」の

価値を少しでも高められると思う。そのような情報があれば、現在、動物飼育をしている学校の「飼育動物を使った活動」が活性化していこう。願わくは、動物飼育を現在していない学校が、「このような活動ができるのなら」と動物を飼育しようと導入を検討

するかもしれない。学校飼育動物の意義を高めていくためのささやかな現場の試みとして、今後、飼育担当者・職員の「連携」や「情報共有」を進めていきたいと考えている。

(愛知県一宮市立神山小学校教諭)